



## 1998年度の主な動き

### ■中央図書館



#### 〈新WINEシステムの稼動〉

WINEシステムは運用開始からすでに10年以上経過し、利用者からインターフェイスの向上を求められていた。また現在のコンピュータ技術の向上に対応したシステムの再構築が求められており、最終的にアメリカのInnovative Interfaces社が提供するINNOPACシステムを採用し、日本語機能などを付加して新WINEシステムとすることを決定した。膨大な書誌・所蔵データや利用者データの移行を経て、1998年11月から情報検索、貸出返却管理など基本的機能を順次稼動させ、1999年4月から本稼動の予定である。

#### 〈利用規則の整備〉

WINEの稼動箇所は中央図書館をはじめ、キャンパス図書館、国際教育センターや演劇博物館なども加え8箇所にのぼる。新システムをより効果的に活用するには、これら箇所の運用規則をできるだけ平準化することが課題となっている。図書館としては歴史的な経緯は十分考慮したうえで、不必要な格差は努めて均一化し、中央図書館、キャンパス図書館等を一つの早稲田大学図書館にとらえ、資料の共同利用のあり方を考える時期にあると認識している。このこともふまえ、中央図書館は1991年から行ってきた資料の延滞に対する課金措置を、新システムへの移行を機に他の箇所にあわせて反則点制に変更した。設定にあたっては平準化を意識し、各箇所との調整に努めた。

#### 〈情報利用環境の整備〉

新WINEシステムの稼動を機に、中央図書館をはじめ、WINE稼動箇所の端末を一新した。端末性能の向上もあり、より快適な環境が整備されたことになる。新システムは研究室や自宅からでもインターネット環境をつうじて図書館ホームページから容易にアクセスできる。インターネットの爆発的な普及、それに呼応したネット上を流れる学術情報の増加に応じて、図書館ではホームページの充実、活用に力を入れている。雑誌記事索引(国立国会図書館)のホームページ画面からの利用やOCLC First Searchサービスなど外部データベースへのより容易なアクセスなどを工夫している。またWINEの利用指導の他、利用希望の多いCD-ROMなど他の電子媒体の利用もあわせ講習会を開催するなど利用促進に努めている。

#### 〈海外図書館との協力〉

1994年に図書館は世界最大の書誌ユーティリティであるOCLC(Online Computer Library Center)に和書遡及データ約30万件を提供した。この提供にたいする海外からの反響は大きく、早稲田大学図書館へのILL(図書館間相互貸借)申し込みの増加にあらわれている。今年度は、あらたに30万件の追加分データを提供することを決めた。今回のデータ提供は中央図書館所蔵図書(洋書)に対応するOCLCデータ交換という側面もあるが、なにより情報の享受ばかりでなく、海外への情報発信の意味を持つ。早稲田大学図書館は1998年9月にARL(Association of Research Libraries)／NCC(National Coordinating Committee for Japanese Library Resources) Japan Projectに参加することとし、同参加機関のうちイエール大など北米12研究機関と箇所間協定を締結し、1998年11月より相互にILL(図書館間相互貸借)サービスを開始した。





1998年11月5日に新図書館システムを部分的にはあるが、稼働させることができた。新図書館システムの検討を始めた当初から既存のパッケージ・システムを導入することを意図していたが、米国で開発され、700館近くのエミ・アジアの大規模な大学図書館や研究図書館に導入されているINNOPACという優れたシステムをベースとして、日本語処理機能等を付加し運用している。引き続き、1999年4月の本稼働を期して主として日本語処理に関わる作業を続けている。本稼働の暁には、検索機能がより一層強化されることになる。

メディアネットワークセンター(MNC)によって推進されてきた「電子図書館プロジェクト」の一環として構築された電子図書館パイロットシステムに、これまで蓄積してきた「雑誌記事索引」1990～96年分のデータに加えて、1997年以降のデータを毎年入手し、学内からのアクセスに限定して利用者に提供している。また、「電子博物館プロジェクト」の一環として計画された「早稲田と文学」等のデータベース化に協力した。

1996年4月に図書館ホームページを開設したが、広報の媒体としてさらに充実したものにするため、その後も更新を続けてきた。1998年度はホームページのメニューのひとつとして「学術情報リンク集」を設け、図書館の蔵書と併せてインターネット上の各種データベースを研究・学習に活用し得るようにした。



図書課設置3年目となる1998年度は、和書流通本の取次変更(トーハン→日販)、新WINEシステム(INNOPAC)への移行など、大きな環境条件の変化があった。とりわけ、新システム立ち上げに関して、少なからぬ人手と時間を割かざるを得なかったが、他方では、6月異動者の後任がなく、また海外研修者も出したことで事実上の減員となり、かなり苦しい業務運営を余儀なくされた。この事態に対処するため、これまでの業務分担を組み替え、兼担体制を増やしたが、総体として時間外勤務の量は増えた。

そうした条件下で、選書・収集の質的レベルを落とさぬよう最大限の努力をした。

和書流通本はトーハンから日販へ取次変更をしたが、見計らい本の質がよくなり、中途から新刊情報による発注に切り替えた。さらに図書予算が厳しいこともあって厳選せざるを得ず、購入冊数が前年比約87%とダウンした。しかし必須資料は購入できていると思われる。洋書については選書アドバイザーの有益な指摘もあり、ほぼ順調に推移したが、人手がたりないため蔵書評価のための調査は1回にとどめざるを得なかった。

11月に仮稼働した新図書館システムは、研究書庫に関しては現在のところ混乱なく移行できている。また、INNOPACでは、以前のDOBISにおいては使用しなかった収書サブシステム(発注/受入)を99年4月より稼働の予定で、学術情報課と協力して検討にあたった。

今年度も数多くの寄贈図書が中央図書館に寄せられた。なかには貴重な資料も含まれ、それ自体は喜ばしいことであるが、重複図書の処置が大きな問題となってきた。地下2階書庫の書架も空き棚があとわずかで、地下3階書庫への展開が具体的な問題となっている。新年度はまず重複図書の処理に手をつけたい。

このほか、例年のことであるが各種展覧会の企画・実施運営には図書課のスタッフが中心となっており、年間12回の展示会開催をおおむね好評裡に終えることができた。また、雄松堂書店との共同事業である「大正期文芸書マイクロ化」も大過なく順調に推移している。







今年度は新システムを稼動させることを課の最大目標として取り組んだ。目録データベース、蔵書管理、OPAC検索の11月稼動を目標に目録ワーキング・グループを形成し、短期完成を期して詰めた業務を行った。

現在動いている最新のシステムの導入を目指したため、データベースの構築、旧システムからのデータのコンバートと今までに経験したことのない作業が非常に多かったが、旧システムからの移行は全体としてスムーズに出来たと考えている。

中国語圏では動いているとはいえ、アメリカのシステムに日本語化(ローカライゼーション)を施すのは当初考えていたよりも負担の大きいものであった。まだ、計画通りの段階まで進んでいないが、間もなくすべての機能が利用できる予定である。

整理課でデータ化を行なっている箇所は昨年と同様、中央図書館研究図書・一般図書、高田早苗記念研究図書館とその構成教員図書室配架図書、語学教育研究所、国際部、演劇博物館であり、これらの図書館に所属する新規受入図書を年度内にデータ化することを目標として業務を遂行した。また、未入力図書についてはOCLCのデータを最大限利用してこの2年間に25,000冊ほどのデータ化を現物図書より行った。語研洋書第二期、演博洋書第二期と旧社研洋書はOCLC RetroConを利用して遡及入力を行ない1999年度の早い時期にWINEにロードする予定である。

データ化で特に取り上げることは以下の通りである。

和書は、研究書庫内の明治期刊行図書の主要な主題と演博遡及図書のデータ化に努めた。

洋書は、中央図書館コレクション(マティアス・コレクション、ポーランド史関係コレクション、Helbig Collection等)のデータ化に努めた。高田記念図書館では、国際機関関係の資料(EDC、ILO、OECD、IMF等)と政研・経研院読移管図書のデータ化を引き続き行い、また環境問題コレクション、Community care Collecionnoのデータベース化を行った。



1998年度、総合閲覧課では、多様化する図書館サービスへの対応、利用者へのサービス提供の積極的なはたらきかけを目標とした。図書館内外の情報検索環境の充実にとともに、利用者は図書館に来なくても情報検索できるようになってきている。レファレンス・カウンターでは利用者が積極的に「図書館ホームページ」や「学術情報リンク集」を利用できるよう、積極的な紹介に努めた。また、新WINEが11月にWEB上に公開され、ますます蔵書検索はしやすくなったが、一方、インターネット端末にふれたことのない利用者もあり、「新WINEゆっくり講習会」を開催し、好評であった。また、春、秋2回開催された「学術情報検索講習会」では、総合閲覧課員が中心となってCD-ROMやインターネット端末を使つての情報検索の方法を紹介した。

情報検索で必要な資料を知り得た結果、資料の所蔵箇所を探すことになるが、早稲田大学内で所蔵していないものについては、慶応大学とのILL(相互貸借)による貸借や複写の取寄せ、国内ILL、海外ILLの利用を薦めている。図書購入費の増額が見込めない昨今、ILL利用の拡大は重要な課題となっている。11月には、ARL/NCC Japan Project 参加の北米にある12の研究図書館と協定を結び、相互にILLサービスを開始した。また、国内ILLについてもNACSIS-ILLの利用についての検討を開始した。これらを契機として、ILLサービスにかかわる迅速なサービス提供、双方の事務手続き、特に料金決裁の方法の簡素化などの課題について検討を開始したい。しかし、手続き業務の簡素化は、一方で申込み受付の増加でもあり、今後、ILLサービスにかかわる業務を図書館全体としてどのように位置付けていくかが検討課題である。







1998年度は、新WINEシステムへの移行の準備を経て、雑誌システムの一部稼動を開始した大きな節目の年であった。旧WINEから新WINEへの雑誌データの変換を皮切りに、新雑誌システムのスタディとトレーニング、そして製本雑誌の所蔵データやチェックインレコードの入力などに着手し、99年度の全面稼動に向けて鋭意作業を進めている。

その一方で、当年度の課題であった、旧社会科学研究所図書室から移管された雑誌、新聞、マイクロ資料の整理、製本、受入を軌道に乗せ、利用者への提供を開始した。

また、利用者へのサービス面では、オリエンテーションの一環として5月と10月に雑誌・新聞記事検索のCD-ROM講習会を開催したほか、4月からG4Faxによる雑誌論文の提供を開始し、離れたキャンパス図書館の利用者が中央図書館に来館することなく、複写機と同程度に鮮明なコピーの入手を可能にした。この他、新着雑誌・新聞コーナーの配架や見出しの改善を図り、より探し易く・より利用し易い環境の整備に努めた。

なお、資料費の高騰もあり、厳しい財政状況への対応策として、一部の和雑誌と洋新聞の納入業者を見直し、少しでも予算を有効に活用できるよう努力した。それとともに、とりわけ価格の高騰が激しい洋雑誌の問題を全学的に検討し、今後における早稲田大学図書館の洋雑誌およびそれに関連するデジタル情報の収集・利用に関する方向性を見出すためのワーキンググループを設置し、目下、報告書の作成に向けて調査、分析を行っているところである。

#### 〈AV業務〉

AVルームの利用者サービスの状況は音声資料の利用に減少が目立つものの、映像資料の利用は12時から17時の時間帯を中心にかなりの待ちが常態化している。AVホールの上映会は、著作権に留意しつつ国内・外の名画を中心に行った。当室の映像資料リストをホームページで公開しているが、近年の特徴として教員からの授業使用資料貸出（複製による）申込が増えて来ている。また他大学図書館から、利用の可否の問合せが増えている。

資料収集に関しては、ジャンル別利用者統計の分析、利用者からのリクエスト、教員の要望など参考に、当室の「AV資料選択基準」に基き、各種ツールを活用し、収集に努めた。昨年度のSPレコードのMD変換を受け、今年度は所蔵付けを完了し、利用者に情報を提供している。

#### 〈複写・マイクロ業務〉

昨年度より開始した夏季及び冬季休業期間のサービス時間の17時までの1時間延長は、16:00-17:00の利用者数が9:00-11:00のそれを上回るなど利用者サービスの向上につながっている。複写・撮影業務そのものは（株）ニチマイに委託しておこなっており順調に推移している。統計からも明らかであるが、ILLの拡大に伴う複写依頼件数の増大は著しいものがあり、学内利用件数は益々増加の傾向にある。

マイクロ資料所蔵リストを図書館ホームページ上で公開し利用者への情報提供を強化している。またマイクロ資料に付随して増加するCD-ROM検索サービスを充実したり、マイクロ資料の内容を国内資料・外国資料の二部門に分けて紹介した当マイクロ資料室作成「解題冊子目録」を活用するなど資料の使い易さに努めている。

今年度も資料紹介セミナーとして、11月に「米国国立公文書館所蔵 日本関係文書」を企画・開催した。出席者は学外関係者も加え100人を超える盛況であった。







■高田早苗記念  
研究図書館



■戸山図書館

開館して5年が経過し、当館の存在が利用者の間に定着してきたと言ってよいであろう。利用者数・貸出数は前年度と比べて大きな違いは見られない。

当館が発足する前に各教員図書室等で受け入れた洋書については、各図書室が付与した請求記号のまま配架し、蔵書管理を行ってきたが、利用者には配架場所がわかりづかった。そこで配架を一本化して、利用しやすくするために、洋書の分類切替作業を6月下旬に開始した。対象となる約15万冊のうち、これまでに約6万冊以上の作業を行った。なお、作業は99年度も継続して行い、2000年3月完了の予定で進めている。作業が完了したあとで全面的な移動作業を行い、配架場所を決定することとなる。それまでは利用者の方々にはご不便をおかけすることもあろう。ご理解をお願いする次第である。

昨年と同じく2月の入試期間中に開館しながら蔵書点検作業を行った。今年度は利用頻度が比較的高い法律・経済・歴史・文学の洋書約8万冊について行った。閉館することなく作業を行ったので、利用者の方々にはご迷惑をおかけすることとなったが、ご理解をいただき感謝している。ちなみに欠本は49冊であった。分類切替作業の最中であり、実質的な欠本はさらに少なくなると思われる。

1997年度から実施した新しい学習図書の選書方法は着実に機能し、利用者から好評を得ている。今年度は蔵書内容の一層の充実を目指して、従来購入の対象外となっていた文庫・新書について改めて購入の可否を検討した結果、文庫4種、新書2種の購入が決定した。評判は良好で、整理途上の図書の閲覧を請求する利用者も少なくないうえ、配架されるのを傍らで待っていてすぐ借りだす光景もみられる。

また、学習図書の受入冊数は96年度2,957冊、97年度3,739冊、98年度7,000冊弱と飛躍的に増大している。今年度の受入冊数の内約2,700冊が文庫・新書である。

一方、高額図書については、1997年度第3回運営委員会で当該年度内に随時選定することが決定されたことをうけて、今年度が新しい購入体制の初年度となった。ただし、随時選定といっても予算の枠は限られているので、年2回行われている研究図書共通選定と高額図書選定を同時に行うことによって、特定の専修・専攻の推薦に片寄ることなく、バランスよく選定することができた。また、同時期選定のもうひとつのメリットは、共通図書と高額図書の予算枠を柔軟に扱うことによってより有効な予算執行ができたことにある。

4月から開始したG4Faxによる学内所蔵の雑誌論文取り寄せサービスは、戸山図書館から他館への申込みは42件であった。今後、より活用されるよう働きかけたい。

秋から冬にかけては新WINEの一部稼動に伴い、職員の研修、利用規程の改訂などで極めて多忙な時期であったが、大きな問題もなく移行できたといえる。図書検索方法に関する質問はほとんどなくなり、利用者にとって使いやすいシステムであると言えるだろう。

2月のロックアウト期間中には、戸山図書館開館以来の懸案だったウォータークーラー3台の設置と1階カウンター照明の改善が実現した。利用環境を整備し、より使いやすい図書館にしていきたいと考えている。





書庫の狭隘化はどの図書館でも対応を急がれる課題であるが、幸いにも51号館理工学図書館では同館地下2階に念願の増設書庫が設置された。これにより約3万冊のスペースが確保され、8月に図書、外国語雑誌約20万冊の資料再配置（移動）作業を行った。

一方、電子化・情報化の進展も著しく、フルテキストで提供できる電子ジャーナルは年度初めの30誌から3倍近くまで増誌でき、将来は書庫狭隘化対策の一助になることが期待される。また念願であった情報サーバがようやく設置され、学内LANを介した化学系二次資料「Chemical Abstracts」の提供を開始した。

11月から部分運用を開始した新WINEシステムは順調に稼働しており、4月からの本稼働が待たれている。学生読書室では従来より個別に貸出・返却システムを運用してきたが、ハード・ソフトとも多くの問題が山積していた。このため11月からの新WINE稼働を契機に全面的に新WINEに切り替え、この個別システムは3月をもって運用を停止することとした。

理工学図書館の資料購入費の60-70%は外国語雑誌の購入で占められており、毎年の版元価格の値上がりと外貨レートの変動は資料購入費の執行に大きな影響を及ぼしている。1998年度は版元値上がり率10%に加えて支払い時期の円安状態のため、外国語雑誌の支払いが予想外的大幅増となり、苦しい予算執行となった。1999年度には新たな対策を検討せざるを得ない。

学生読書室の利用率は相変わらず高水準を維持（年間貸出し冊数約20万冊と推定）しており、51号館理工学図書館でのレファレンス量も毎年20%増の右肩上がりが継続している。理工学図書館ではこうした限られたスペース、ファンド、要員などでいかに利用者満足度を維持・発展させるかが大きな課題となっている。



外国雑誌の高騰の波がいよいよ所沢図書館にも押し寄せ、1999年の契約についてはついにタイトル削減が不可避となった。結果的には105タイトルの継続中止を決定したが、それでも1998年度に比較して外国雑誌に要する予算の総額は増大している。1999年度の外国雑誌価格は為替レートの変動も含め前年比約30パーセントの値上がりとなってしまったことになる。幸いなことにこれまでは実際にこのような事態に直面しないまま済んでいたが、これからは本格的に対策を検討しなくてはならない。

所沢図書館では所沢キャンパスのHUMANET内で利用できるCD-ROMデータベースサーバを稼働している。しかし、何らかの障害があった時、館員の知識ではその対応に困難があり、より円滑に対応できる状況を実現できるよう検討していた。その結果、HUMANETを管理している情報システム運営室の協力が得られることになり、その管理下へサーバを移設することが承認された。運営室では専門の業者が常駐しており、障害の発生には速やかに対応できることになる。

資料廃棄について、今年度は「INDEX MEDICUS」と年鑑・白書の古いものを処分した。前者は今では完全にオンラインデータベースのMEDLINEが代替手段となっており、冊子としての索引は利用者がなくなっているためである。また、後者は中央図書館その他で保存されているため、所沢図書館で責任保存する必要のないものである。

